

会員新刊紹介

米村みゆき・佐々木亜紀子編

『〈介護小説〉の風景

―高齢社会と文学―

アンチ・アンチエイジング―「老い」を否定的にとら

える見方について、問題を提起する本書の言葉である。編者は、近代産業社会の価値基準に基づいて「若さ」に過剰な価値を置き、「老い」を「非効率」の理由で否定することに、危機感を抱く。現在、高齢社会に生きる私たちにとって「高齢者介護の問題」は重要な課題である。本書の目論見は、こうした介護問題と向き合うにあたって、文学（小説）がどのように貢献できるのかを求めたものである。具体的には高齢者介護を描いた数々の小説―介護小説―を取上げながら、〈介護小説〉を繕くことよって、普段みえにくく潜在化している問題を顕在化させるのを期待している。

本書の構成は、編者の手による序章と六つの論文、それに各論を補強している十二個のコラムによって成り立っている。以下各章を簡単に紹介する。

・米村みゆき・佐々木亜紀子「はじめに―〈介護小説〉

から見えてくるもの」では、介護という状況を「世界と私たち自身とを今までとは異なった別の様相で見つめさせてくれる新しいフレーム」、また「介護が女性の役割と見做されてきた事実を考え併せるとき、それが女性に集中する問題」と位置付け、高齢者介護には家族観、結婚観、死生観、職業観、特にジェンダーにまつわる諸問題が集結していると見る。

・第1章佐々木亜紀子「〈記憶〉を書く男たち―青山光二と耕治人の老老介護小説」では、認知症の妻の介護を描いた青山光二と耕治人の「高齢者夫婦の老老介護小説」という〈私小説〉を取り上げる。この私小説は「男／夫」の一方だけが語り、一方だけの記憶に依拠して選別、再編した物語化であるため、歴史は独占され、「視る／看る／語る」男vs「視られる／看られる／語られる」女という構図は固定されたままである、と指摘する。そのため高齢の妻たちは、過去の価値のなかに閉じ込められてしまうことから、介護の当事者としての尊厳ある生活を維持する難しさを、これらの作品を通して浮き彫りにしている。

・第2章山口比砂「介護するのは何のため?―家族介護の動機付けをめぐって」では、家族介護の動機付けを探ることで、介護の問題を考察したものである。丹羽文

雄の「厭がらせの年齢」、幸田文の「父—その死—」、モブ・ノリオ『介護入門』を取り上げ、戦後の憲法改正により戦前の「忠孝一致」思想が機能しなくなった時代、また戦後高度成長期の「家族神話」が機能しなくなった時代、という家族介護のあり方そのものが転換していく時期に書かれた小説として、際立った特徴を持つと見る。

・第3章米村みゆき「高齢社会の「解釈」を変える—有吉佐和子『恍惚の人』と〈現実〉の演出」では、本書で取り上げている〈介護〉という題材を、手記やドキュメンタリーではなく「小説」という媒体に載せるとは、どういうことなのかと問い、それに関して考察している。社会的な影響力を持つ同小説—介護小説の意義は、ノンフィクションでは届き得ないものの方や世界が展開される可能性を発見することである。

・第4章杉田智美「管理される「古い」／監視される「主婦」—一九六〇年代『瘋癲老人日記』が語る介護」では、介護される側の老人が語るレア・ケースの記録として、日記という形式に、介護記録、手記などまで付け加えられている記録として同小説を位置づけ、一九六〇年代小説に書かれた介護を現時点から振り返って考察する。そのなかで老人男性の性の喪失や女性が無性化されると指摘し、高齢者の身体を無性的なものとみなす社会的通念

により当事者性が奪われ管理されると見る。さらに主婦と娼婦の間におかれた介護する側の嫁は、舅・家族に二重に監視されたと見る。

・第5章古川裕佳「介護と〈反介護〉の風景—されたくない「私」からの解放を求めて」では、志賀直哉、岡章太郎、深沢七郎、夏目漱石等の小説を取り上げ、家族や家庭による介護を描く場合に、なぜ〈反介護〉的な心象が描かれるのかを検討し、現代のわれわれが介護に抱く感情のあり方と併せて考察する。

・第6章光石亜由美「どこで暮らすか？ 誰と暮らすか？—高齢者の性愛と〈介護小説の可能性〉」では、「サザエさん」の七人家族の二十年後、介護問題を困むことを想像することで始まる。それは恋愛、セクシユアリティにまつわる老人ゆえの困難、つまり高齢者の性愛問題に焦点をあて、高齢者を性から遠く離れた存在としてみなす社会通念を訴える。谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』や川端康成『山の音』においては、介護者である嫁の役割を、佐江衆一『黄落』や渡辺淳一『エ・アロール』においては、介護者としての息子が優位に立つ権力関係を指摘し、また施設の高齢者たちの性的存在としてのエピソードを組上に載せ〈介護小説〉の未来形を探る。

またコラムでは、介護報道、映画、アニメーションに

おける高齢者の表象、性的マイノリティの老後、〈老女〉のセクシュアリティの話題についても提供していて興味深い。

ところで、高齢化に伴う社会諸般の問題は、世界的趨勢としても直ちに共感できる部分が多い。韓国の場合、〈介護〉という言葉自体まだ馴染みが薄く、日本のように高齢者の老後や福祉全般を象徴するものとして使われることはほとんどない。というのは、韓国で介護を称する言葉としてよりポピュラーに使われるのは、〈老人看病〉や〈病救援〉という、病気そのものを退けるための意味が強いものである。すると、介して護る意味の〈介護〉を使う日本の方に、患者と患者に向き合っている人たちとともに生きていく前向きな姿を感じ取れるのは、私だけではないだろう。それを反映しているかのように、韓国では次々と日本の介護福祉が紹介され、保険などの名称に「介護特約」、「介護保障」などの新生の言葉が用いられるのは、こうした日本語のよい響き（もちろん介護福祉の内容も含めて）を積極的に受容した結果であると考えられる。

では、〈介護小説〉になると、どうなのか。日本に韓国の介護の風景が知らされたのは、韓流ブームのおかげ

もあって、身近に接することができるようになった韓国のドラマを通じてである。それに韓国のドラマの定番のテーマが、親と子、家族愛―孝行などに集中しているのも周知のところであろう。三世代の家族同士における様々な人間関係を取り上げる物語は絶えず新しい因果関係を生成していく。小説の場合、シンギョンスク『じゃが芋食べる人々』（創作と批評社、二〇〇五）をあげられる。入院している父を看病する娘が、知り合いの姉さんに手紙を書く形式を借りた小説である。娘の介護の体験や周辺の死をめぐる経験などが綴られ、現在韓国の高校の文学教科書に収録されている。この作品以外にも韓国の小説や文学の場面において、親の面倒をみることは数多く扱われているにもかかわらず、現段階では〈介護小説〉と評価されてはいない。なぜなら〈介護〉というものをひとつの現象として認識しはじめたのがごく最近のことであるからだ。

UN「世界人口展望」によると、韓国は二〇〇〇年を基点にして、高齢化社会（65歳以上の人口の比率が7％）に、二〇一八年には高齢社会（14％）に入ると見ている。これに比べて、日本はすでに一九七〇年に高齢化社会、一九九四年に高齢社会に、また二〇〇六年に超高齢社会（20％）に入った。さらに主要国のなかで、韓国

は、超高齢社会にいたる時間が僅か二十六年で一番短い

という。これは本書で取り上げる有吉佐和子『恍惚の人』

(一九七二)とモブ・ノリオ『介護入門』(二〇〇四)が、

二〇〇五年、二〇〇六年韓国で翻訳され話題となったのと通じる。なぜ出版の三十五年後の二〇〇六年の時点で、

『恍惚の人』が韓国で紹介されたのか。それは急激に高

齢化していく韓国社会において、また介護をめぐる問題

に家族が儒教精神に戸惑い自分たちの老親を病院に入れる選択をしていく状況においても、本書に取り上げられる

ている介護小説の風景にひとつの用例を見つけようとした

たからではないか。(『介護小説』の可能性が国を超えて共有され広まっている。

以上のように、社会に内在する問題を映し出す鏡として文学作品を読みとり、その問題ゆえに抑圧・隠蔽されている部分を取り出していく本書の試みは、文学と社会の在り方を考える上で、文学の機能を改めて感じさせる貴重な研究だと思われる。ただ、日本における介護がフィリピン人を介護者として募集するなど、アジアを視野に入れないと成り立たなくなっているのが現状であるため、今後は在日コミュニティを含めた日本だけの状況にとどまらず、韓国中国など、その思想を共にするアジアにまで範囲を広げて、介護をめぐる文学研究が深め

られていくのを願う。

二〇〇八年一月二四日刊、森話社、四六版二九頁、

一、四〇〇円＋税

(李 明喜・名古屋大学大学院博士課程前期)

岡本 勝 著

『近世文学論叢』

本書は、平成十九年三月十一日に逝去された本会会員岡本勝氏の遺稿集である。

氏の研究者としての業績を今さら述べるまでもなく、長年俳文学会及び日本近世文学会の中中部地区の委員として学会運営に尽力され、また当地の近世文学研究会である東海近世文学会の代表として我々後進を先導してこられた。それだけに氏の早過ぎる死は、寝耳に水の衝撃であった。まだ、これからまとめるつもりのお仕事はいくつもあったと推察されたし、そのことをご子息の聡氏は「あとがき」において次のように述べておられる。

父は恐らく、古稀の誕生日にあわせて、この論文集の中の伊勢俳諧の部分をもとめて本にするつもりだったのだらうと思う。題名は『伊勢俳壇の史的研

究」。父がフロッピーに題名もつけて、いつも愛用していた親指シフトのパソコンの中に入れていた事からわかる。後十年は、研究を続けるつもりだった。そして、自分でも、研究分野を人から聞かれるといつも答えていたように、「芭蕉と西鶴とその周辺」の研究をまとめるつもりだった。

盟友であった雲英末雄氏の「すべて」収めるといふ助言もあって、本書は氏の遺稿を出来るかぎり収めたものとなった。その内容の多彩さは、目次によっても明らかである。本書は、

第一章 芭蕉とその周辺

第二章 西鶴とその周辺

第三章 官長とその周辺

第四章 伊勢俳壇

第五章 書評・追悼

の五章から成る。「芭蕉と西鶴」そして郷土伊勢にかかわる「宣長」と「伊勢俳壇」、それぞれのテーマに真摯に取り組まれた姿勢が彷彿とする。

第一章には、生前芭蕉関係の著作に収録されなかった論考三本と翻刻『今市物語』、さらに最晩年に書かれた「芭蕉と素龍」「芭蕉と桃印」の二論文を収める。特に「芭蕉と桃印」は氏の絶筆であり、亡くなられた直後の「文

学」平成十九年三月号に発表された。そこには常に芭蕉研究の一線にありたい、というお気持ち如実に示されているように思われた。素龍と桃印という芭蕉周辺にありながら謎の多い人物に対する考察と、諸説に対する細かな反論や推論は、実は松阪商人越後屋や、伊勢の石水博物館に伝わった写本といった資料をもとにして展開された。

第二章には、西鶴関係の論文十二本を収める。その中には『好色一代男』の成立について」といふ卒業論文を基にした論文が含まれている。これが出发点であり、この出发点以降西鶴へのアプローチは、『西鶴諸国ばなし』の方法」等の出典や挿絵から、西鶴の文学的意図を読み込んでいこうとするものと、『万の文反古』の成立―柱刻の意味するもの―」等の綿密な成立論、の二方向が考察の中心となった。一、二章ともに門下の早川由美氏による「解題」は、ときに生前の氏の講義や口調を思い起こさせ、本来氏が訂正しておきたかっただけの瑕瑾にも触れてフォローされている。

第三章には、氏の郷里松阪の偉人本居宣長関係の論文十七本を収める。「解題」の中で、現本居宣長記念館館長である吉田悦之氏は、

研究者としての岡本先生の出発点は、俳諧師大淀

三千風研究と、本居宣長記念館蔵書調査であった。

その後、三千風研究は三重県の俳壇研究へと広がり、宣長研究も射和文庫から石水博物館所蔵品の調査まで県内外の文庫の調査により一層の充実を見た。三重の近世出版史研究もそこから派生した成果の一つである。先生はそれらを統合する形で、「松阪学」を構想し提唱されたが、完成を見ることはなかった。と述べておられる。書簡をはじめとする新資料の紹介、家族や姻戚の關係に触れる一族の文書や、出版史に関する資料の考察などが、宣長の様々な側面を映し出す。特に興味深いのが、序文で雲英氏も触れておられる「青春期宣長の物語の構想とは」である。国学に専心する以前の宣長の夢想の中には、「端原氏物語」(仮称)なる「物語」があったという事実だけではなく、物語の「系図」と「絵図」をつなぎ合わせ「書かれなかった物語の全体像に迫ろうとする試み」(吉田氏)をされたことが宣長という人物を身近に感じさせる。松阪の土地に根ざした宣長の存在を、より多面的に考える作業の中から「松阪学」の構想も発展してきたのであろう。

第四章には、伊勢俳壇関係十四本と愛知教育大学所蔵の一枚摺、大名の俳諧一枚摺の資料の一覧・入集者等の内容紹介を収める。氏が最も力を入れて一書にまとめよ

うとしておられた分野であらう。

「伊勢の談林時代」は、従来知られていなかった『御田扇』の紹介を始めとして初期の伊勢俳壇の様相を示す。また伊勢俳壇を象徴する神風館の代々の実相を、八世黎翁入楚や十三世木枯庵丘高といった神風館を継いだ人々の閱歴を通してその時代と歴代をつなぎ、実態を明らかにしようとした(黎翁入楚をめぐって)「木枯庵丘高・素描」。

さらに「伊勢松坂」「津」「伊勢神戸・白子」「桑名」のそれぞれの地域の俳諧交流状況、俳諧師の動静をまとめておられる。殊に松坂など商業都市における富裕な町人が果たした「文化的役割」、特に江戸との密接な關係が影響していることに注目された。一方、藩士俳人の活動をも紹介された(伊勢松坂の俳諧―一葉庵成立前後を中心に―)「二日坊宗雨とその周辺」「津の藩士俳人茨木素因」など。

翻刻や引用部分の原本確認のために、氏が長年にわたって蒐集された伊勢俳書及び(俳書の)写真やコピーの搜索を聡氏にお願いしたが、「父が使っていたまま」という状態が最大のネックとなつて、搜索は難航、最終的には私は手持ちの本や写真資料を探し回り、国文学研究資料館等へ聡氏に通っていただけはめになつてしまつ

た。人名・俳号・庵号のよみについても、いくつか疑問はあったが、一般的なよみを優先して、見切り発車した。明らかな誤植や古い原稿の中にあつたミスは訂正したが、生きておられれば「いや、その資料については」と一言どころか、お叱りがあつたかもしれない。

卷末第五章には、昭和五十三年以降に書かれた書評九本と櫻井武次郎氏追悼文を収める。最も早い時期の書評を除いて、いずれも俳諧関係の書に対する評であるだけに、個人的に親しかつた方の著作であっても、時に綿密な指摘が見られる。奇しくも氏が亡くなられたのは、櫻井氏の四十九日であつたという。

「あとがき」に聡氏が書いておられるように、氏の病は難病の上に進行が早かつた。研究会例会の時など、まだそのご不在が信じられない気がすることがあつた私に、遺稿集の校正と解題執筆というお手伝いの話が舞い込んだ。本書は雲英末雄氏の監修で収録論文の選定もすべて聡氏と相談の上決定されており、ゲラの束が到着して改めて戴いた抜き刷りの多さを思い出し、「先生は、こんなに仕事をしておられたのだ」と再確認した。

伊勢俳書や伊勢俳壇関係の資料の収集については、随分以前に名古屋の古書肆藤園堂の店先でお目にかかり、

雑談をしていた折り、「毒を食らわば皿まで、だよ」と仰つておられたのを思い出す。実はその時、冗談めかしのお話ぶりだったが、目は笑つておられなかった。常に「伊勢」関係のものなら何でも、出来る限り入手しておこう、と心がけておられたのだ。その執念とも言える資料博搜によつて、伊勢俳壇の概要は明らかになろうとしていたのであり、四章は、まさに『伊勢俳壇の史的研究』の基礎原稿となるものであつた。探すのも大変な量の本や写真を整理し、既発表の原稿に手を入れ、恐らくは構想しておられた新たな稿を起こして全体を整える、その作業をなさるおつもりだつたに違いない。

監修をされた雲英末雄氏は、本書の刊行を見ずに逝去された。次世代の方々は本書のあちこちに広がる今後考究すべき問題点に、是非取り組んでいただきたい。まことに僭越ではあるが、そう思っている。

二〇〇九年一月二三日刊、おうふう、A5版八六九頁、
三六、〇〇〇円＋税

(服部直子・中部大学非常勤講師)

安田徳子著

『地方芝居・地芝居研究』

—名古屋とその周辺—

安田文吉・安田徳子著

『ひだ・みの地芝居の魅力』

『地方芝居・地芝居研究』はA5判三三八頁、ハードカバーの研究書である。それに対して『ひだ・みの地芝居の魅力』は新書版サイズ一八三頁、新聞の連載記事をまとめたもので一般向けの本という違いがある。どちらも名古屋周辺地域の地芝居を題材としたものであり、著者が共通するので今回は一緒に紹介させていただきたい。

著者の安田徳子氏は中世和歌の研究者としてはすでに知られているが、パートナーである南山大学教授安田文吉氏とともに、『歌舞伎の楽しみ』（北白川書房）や、『歌舞伎入門』（おうふう）などの歌舞伎関連の本を出しておられる。長年に渡り、名古屋近郊の芝居小屋の実態調査や台帳の整理などを行った結果を、勤務先岐阜聖徳学園大学の出版助成を得て刊行されたものが『地方芝居・

地芝居研究』であり、岐阜新聞からの依頼で岐阜の地芝居について連載されていた記事をまとめたものが『ひだ・みの地芝居の魅力』である。文学・文芸の研究は、同じ分野を研究する一部の範囲でのみ読まれ、理解されることが多いことだろう。こうした研究の世界の中で、広く一般にも向けて研究成果を公表するという点で、この二冊は非常に珍しいものだといえよう。

京・大坂・江戸という三都の大芝居に対して、地方都市で行われていた歌舞伎（地方芝居）については少しずつ研究が進んでいるが、地方の村で地元の人たちが自ら楽しんだ地芝居（農村歌舞伎・地歌舞伎）については研究は、全国的にまだ基礎資料の調査も完了していないところが多い。

『地方芝居・地芝居研究』は、序章「地方歌舞伎の発生」、第一章「名古屋芝居」、第二章「名古屋圏の地芝居」、終章「名古屋芝居と名古屋圏の地芝居」の四章からなる。序章から第一章までは、京で誕生した歌舞伎の地方への伝播、名古屋においての興行の実態を文献資料に基づいて検証する。第二章は、美濃・三河地方の地芝居の上演と振付師、演目、演目の特質として、古くからの資料が残る足助から説き起こし、それぞれの特色や違いなどに触れる。終章は、名古屋の在地役者とその周辺の地芝居

との関わりなど、両者の関連についてまとめる。

『ひだ・みの地芝居の魅力』は、元々、各務原市の村国座（現存する最古の地芝居用芝居小屋）の平成の大改修に関連して岐阜新聞に連載されていた記事に加筆訂正されたもの。そのため、一項目が、写真入りの見開き二頁でまとめられていて、非常に見やすいレイアウトである。

内容は、1「歌舞伎と地芝居」、2「村国座物語」、3「岐阜県各地の地芝居」、4「地芝居の演目と演出」という構成。そして、はじめに「元氣いっぱいひだみの地芝居」、最後に「地域活動としての地芝居」という、地芝居に関わる人々や飛騨美濃地域へのエールをこめた言葉で結ばれている。

両書に共通する地芝居の演目は、大芝居ではほとんど上演されなくなってしまったものがいくつも紹介されており、どうしてそのような演目が好まれたのかについても考察がある。

『ひだ・みの地芝居の魅力』は地芝居の魅力を知る入門用として、手頃な分量と内容である。そこから、さらに興味を発展させていきたい場合には、『地方芝居・地芝居研究』へという道筋も考えられるが、先に『地方芝居・地芝居研究』を読んだ後で、そこに登場する地芝居

団体や演目について具体的に知るために『ひだ・みの地芝居の魅力』を見ることがもあつてもよいだろう。

現在日本全国で二百近い地芝居団体が活躍しているが、岐阜はその中の一割以上の団体が集中している。歌舞伎という演劇が、どのようにして人々の心を捉えたのかという問に対する答えの一つとして、地芝居を知ることには大きな意味があると思われる。

〈『地方芝居・地芝居研究―名古屋とその周辺―』

二〇〇九年二月刊、おうふう、A5版三三八頁、

一五、〇〇〇円＋税

〈『ひだ・みの地芝居の魅力』

二〇〇九年三月刊、岐阜新聞社、新書版一八三頁、

一、一四三元＋税

（早川由美・愛知淑徳大学非常勤講師）

櫻井豪人 編著

『三語便覧』

初版本影印・索引・解説』

本書は、幕末の洋学者・村上英俊により刊行された日本語・西洋語対訳単語集『三語便覧』の影印・索引・解説

説である。

『三語便覧』はこれまで一般には後印本の複製しか利用できない状況であったが、本書は極めて初印に近い影印に加え、日本語索引と仏語・英語・オランダ語見出しによる西洋語索引を付す。編著者の述べる通り、日本語史資料として十分に益するよう整備されている。

本書の構成は次のようになっている。

はじめに

凡例

解説

『三語便覧』地名一覧

『三語便覧』日本語索引

『三語便覧』西洋語索引

『三語便覧』初版本影印

あとがき

解説篇では、各伝本間における書誌的異同や当世諸書の照査から、『三語便覧』の刊行年と、本書所収の影印が初期の印本であることを明らかにする。序文の内容については、時代背景から成立事情を立体的に考察し、当時における刊行の意義と意図に迫っている。また、『三語便覧』の本文が如何なる典拠から成り立っているのか、当世の洋学諸書との詳細な比較によってでき得る限りま

で追究している。これらは『三語便覧』の最先端の研究成果であるとともに、幕末の洋学研究のケース・スタディとしても大いに参考すべき内容である。

前著『類聚紅毛語訳・改正増補蛮語箋・英語箋』と併せ、初期洋学の成果を日本語史資料として利用しやすい形に整備し、学界に供した編著者の多大なる努力に、敬意を表したい。

（二〇〇九年三月刊、港の人、A5判六六四頁、

一八、〇〇〇円＋税）

（永井圭司・名古屋大学大学院博士課程後期）

疋田雅昭・日高佳紀・日比嘉高編著

『スポーツする文学』

一九二〇—三〇年代の文化詩学』

スポーツと文学。この二つを接続し、論じるにあたって、本書では次のようなロジックを用意している。

スポーツは、スポーツそれ自体で存在しているわけではない。一方に各々の競技の特質や、競技者・チームのプロフィール、身体的パフォーマンスなどの固有

テニス^{テニス}の肌理^{テニス}があり、もう一方に観衆がそれぞれの文脈に応じておこなう解読と意味づけがある。この両者の相互的な行為のなかにこそスポーツはある。我々はこれを何かに似ていると感じる。「文学」という営為に。

〔はじめに〕一三頁

ここでは、文学テクストを読むことと、スポーツを見る^{テニス}ことが、ともに何かを「意味づけ」てゆく営みであることが指摘されている。こうした観点が示すように、本書が試みようとするのは、単にスポーツの歴史を文学の記述によって補完することではない。それよりも、文学をはじめとした「意味」を作り出し媒介してゆく表象システムのなかに、スポーツがいかに巻き込まれ再構築されていったのか」が、取り組むべき課題として中心化されてゆくことになる。

本書は、関西・西日本の気鋭の文学研究者たちを中心に編まれた論文集である。論者たちは、異なるスポーツを題材とした上で、各々が得意とする手法や理論に基づき分析を繰り返していき、結果として、先に挙げたロジックは共有されながらも、多種多様な議論が展開されている。

掲載論文を紹介しておこう。なお【】内は、各論文

に付けられているキーワードである。

青木亮人「スケートリンクの沃度―幾―山口誓子『凍港』の連作俳句について」【人工施設／体臭／モダニズム】

天野知幸「時を忘れる愉楽―疑似ゴルフに人々が抱いた夢想」【都市／スピード／中産階級】

西山康一「(肉体)におびえるとき―モダニズム前夜のスポーツ小説として『友情』を読む」【卓球／精神修

養主義／遊戯性】

日比嘉高「声の複製技術時代―(スポーツ空間)と複合メディア状況」【ラジオ・アナウンサー／オーディエンス／野球】

松村良「ゴムボールを手にした子供たち―『少年俱樂部』に見る野球」【メディア／少年野球／立身出世】

日高佳紀「テニスコートのレトリック―田中純と月刊『テニスファン』」【テニス／メディア／スター・プレーヤー】

笹尾佳代「変奏される(身体)―女子スポーツへのまなざし」【スタイル／ジェンダー／陸上競技】

杉田智美「水際のモダン―身体と欲望の劇場へ」【水泳／コラーージュ／視線】

西川貴子「『わたし』と『わたしたち』の狭間―『走ること』を語ること」の意味」【駅伝・マラソン／共同体

／語り】

正田雅昭「スポーツしない文学者―祭典の熱狂から抜け落ちる「オリンピックの果実」」【スポーツ・イベント／逸脱／ポート】

また、これら論文に加えて、西村将洋「モダン・スポーツ批評―アドルフ・神原泰・中井正一」、波瀾剛「スポーツ小説」の盛衰―雑誌「アサヒ・スポーツ」の場合―、宮園美佳「プロレタリア文学とスポーツ」、熊谷昭宏「死に至るスポーツを語る―一九三〇年代山岳雑誌のなかの「文学」とその周辺」がコラムとして掲載されている。これらコラムはそれぞれ材料に新味があり、論文に劣らず興味深い。

近年の文化研究の隆盛のなかで、スポーツは社会学や歴史学をはじめ、さまざまな研究者によって分析の俎上に載せられてきた。そこでは、スポーツとは単純に「善きもの」などではなく、ジェンダー・バイアスを再生産し、強化する側面を有すること、あるいはファシズム的な全体主義と親和性を持ち、時にはその体制の維持に負担するものだったことなどが繰り返し指摘されてきたのである。

このような文脈のなかに本書を位置づけてみれば、その意義は二点にまとめることができると考えられる。

ひとつは、これまでのジェンダーおよび文化政治学的

な研究の拡充に寄与している点である。ある理論的枠組みの有効性を、実際の事例において確認してゆく作業の蓄積が重要なのは言うまでもない。またその過程で、これまで歴史研究や文化史のなかで埋もれてしまっていた、資料の掘り起こしがなされていることも評価すべきであろう。

もうひとつは、スポーツが表象される瞬間に生じてしまう「ずれ」や「過剰性」に着目している点だ。

人がスポーツに接するのは、ただ自らが行なう時だけではない。それは観られ、聞かれ、読まれるものでもある。おそらく、現代人の多くにとつてみれば、より日常的なスポーツ体験とは、メディアを通じたそれである。そうであるならば、我々にとつてのスポーツを考える際には、メディア上の表象という問題を焦点化せざるを得ない。

本書の議論を読む中で気付かされるのは、文学研究がそうした問題を解くためのツールとして高いポテンシャルを有していることである。日比論文や正田論文に典型的にみられるように、文学研究的な読解は、テキストに生じる微細な齟齬を抉りだし、それに意味づけを与えてゆく。見方によつては、それは執拗でひねくれた分析なのかもしれない。だが、文学研究が文化研究という領域に寄与し得るとすれば、このような技術から見いだされ

る、新たな〈読み〉の提示を通じてなのではないか。

本書は、これまでのスポーツ文化論の現時点における到達点であると同時に、これからの文学と文化学の接続のあり方のひとつも示しているといえよう。

二〇〇九年六月二二日刊、青弓社、A5版三三三頁、

二、八〇〇円＋税

（竹内瑞穂・名古屋大学大学院博士研究員）